

スポーツに焦点当て

ダイバーシティシンポジウムで議論

日本大学ダイバーシティシンポジウムが「あらゆる『個』が輝く未来へ」のテーマで9月7日、日本大学会館で開催された。スポーツが持つ多様性を推進する力

について、さまざまな専門家を招いて議論が交わされた。

開会のあいさつで大貫進一郎学長は「スポーツは年齢、性別、国籍、障がいの有無といったあらゆる垣根を越え、ダイバーシティを身

近に感じさせてくれます。スポーツの力を多様な視点から探究していただき、たいと述べた。



シンポジウムで、まず来田享子中大文学部学長・スポーツ科学部教授が、スポーツを通じたダイバーシティ推進の現状と課題等について基調講演。

続いて本学卒業生でパ

は、さまざまな学部

にした専門家が意見交換した。写真。

シンポジウムには本学学生、付属高校生、教職員

神田消防署から感謝状

日本大学病院 東京DMAT 工事現場の救護活動で

日本大学病院東京DMAT(災害派遣医療チーム)は、今年3月に東京都千代田区の工事現場で一酸化炭素(CO)中毒になった多数の傷病者に迅速、適切な救護活動を行



行ったとして、東京消防庁神田消防署から感謝状が贈られた。16人が救急搬送されたが、死者は出

日大病院が新たに3事業

産後ケア、認知症ケア、アトメイ

日本大学病院は、このほど三つの新事業を相次いで開始した。産後ケア、認知症ケア、乳がん治療後の「アトメイ

ク」の3事業で、総合病院として患者のニーズにきめ細かく応え、地域医療に貢献するとともに収益拡大を目指す。

産後ケアは子育て支援に力を入れる地元千代田区と連携し、7月にスタート。産後間もない母親に短期入院によって、心身にリラックスできる環境を提供。新たに助産師を

採用し、育児相談や授乳指導などを行い、母親自身が自宅でも継続できるケア方法を習得できるようサポートする。

認知症ケアは複数の診療科が関わる「日本大学病院メモリーセンター」を新たに立ち上げ、主に認知症の前段階である軽度認知症(MCI)の診断、治療を推進する。

近年、認知症の進行を抑える新しい治療薬が登場し、早期診断、治療のニーズが高まっていることに

「認知症サポート」に協力する。同院は認知症の原因物質の蓄積を診断で

工学部が8月30、31日の両日、日本テレビ系列「24時間テレビ」の福島メイン会場となり、6学科の学生が「ふしぎがいっぱい! 日大」を演じた。また競技用車椅子によるテニスやボッチャ体験コーナーも設けられた。



工学部では「大学の資源を活用し、工学を通じて今後も地域の皆さんに還元できれば」(企画・運営担当)としている。

技術教育賞を受賞

自動車講習会が評価

生産工学部の自動車工学リサーチ・センター(NUCAR、センター長・石橋基範教授)が進めてきた「リカレント教育を目的とした自動車技術の講習会の企画・開催が工学系学会大手、自動車技術会の2025年度技術教育賞に選ば

分の2を占める。石橋教授は「この学会が認めてくれたことはかなりのインパクト。これを足掛かりに企業教育との連携も進め、共同研究が加速できれば」と期待感を示している。受賞対象となった講習会は人材育成を目的に一般の方を対象とした「基礎講習会」(平成22年度開始)とセンター

「読み 詠み 学ぶ」展を開催

日本語と日本文学の貴重資料



文理学部資料館は5月15日から7月22日まで、図書館棟1階展示室で「読み 詠み 学ぶ」日本語と日本文学の貴重資料展を開催した。文理学部では日本語と日本文学に関する貴重な文献を数多く所蔵しており、今回はその中から一般にも知られた物語や和歌など45点を展

散文、韻文、研究書の3部構成。古活字で印刷された「日本書紀」(慶長15年版)、色彩豊かな「百人一首かるた」(江戸時代後期作)、旧重要美術品(昭和11年)の「枕草子」(江戸時代初期写)、平安時代頃に書写された「妙法蓮華経」などよく知られた資料のほかに、その息遣いのよ

大貫進一郎学長が学部等を訪れ、教員、学生の活動や施設を紹介するショート動画「学長が行く」の今年度の撮影がこのほど始まり、7月から公開を開始した。今後、付属校にも範囲を広げ紹介していく。



インタビュー

ダイバーシティ 本学の取り組みとこれから 若い世代のリードに期待

渡辺 美代子 業務執行理事(ダイバーシティ推進委員会委員長)



本学は「ダイバーシティ推進宣言」を令和5年4月に公表し、人の多様性だけでなく組織運営や教育研究についても広く多様性を推進する姿勢を打ち出した。ダイバー

「日本大学女性教員のためのネットワーク・ミーティング」等、主に女性活躍に焦点を当てた取り組みを実施し成果を上げてきました。スポーツに

「日本大学女性教員のためのネットワーク・ミーティング」等、主に女性活躍に焦点を当てた取り組みを実施し成果を上げてきました。スポーツに

「日本大学女性教員のためのネットワーク・ミーティング」等、主に女性活躍に焦点を当てた取り組みを実施し成果を上げてきました。スポーツに

「日本大学女性教員のためのネットワーク・ミーティング」等、主に女性活躍に焦点を当てた取り組みを実施し成果を上げてきました。スポーツに

●生物資源科学部3年 澤谷 萌生さん

中心メンバーとして奮闘

大阪 関西万博 世界キャッチボールプロジェクト



2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）開幕前の4月4日、会場のシンボルである木製の「大屋根リング」の上で、世界約70の国と地域から集まった約420人がバトンリレーのようにキャッチボールを行う「世界キャッチボールプロジェクト」が開かれた。言葉や文化の違いを超え、世界平和への願いを発信するのがコンセプト。大学生有志らが企画したこのプロジェクトの副代表として中心的な役割を担ったのが、生物資源科学部3年の澤谷萌生さん。「自分自身の大きな財産になった」という澤谷さんに話を聞いた。

——参加した経緯は

きっかけは、代表を務める大武優斗さん（武蔵野大4年）の「世界中の人と友達になりたいかな？」という昨年6月の

インスタグラムの投稿でした。札幌日大高校時代にタンザニアでボランティア活動をしたり、カナダに短期留学したりするなど海外に興味があり、面白そうだなと思いリアクションしたのが始まりです。企画した当初は何も決まっていりませんでしたが、万博会場でキャッチボールをするというアイデアが具体化していきました。

——実現に向けてどんなことを

課題がたくさんありました。大屋根リングの使用は一般公募しておらず、許可を得ることからして大きなハードルでした。

私は広報・人事を担当しましたが、大変だったのが外国人の参加者集め。万博協会から「50カ国が集まる証拠を」と求められ、自身の留学経験や海外ネットワークを生かして声をかけまくり、約60カ国の人に意思表示してもらったことができました。

後援・スポンサー集めも困難を極めました。



世界70カ国・地域から420人が参加した

が分からない中、水面下で行ったことを余儀なくされました。

正直言うと、途中で「本当にできるの？辞めちゃうのかな」と考えた時もありました。しかし、私が誘ったメンバーや参加を表明してくれていた海外の知人たちのことを思うと、そうした選択はできませんでした。それと「無理だ」と人に言われると、負けず嫌いな性格なので「いや、できる」と思ってしまうところもありますので（笑）。

——たくさん経験を積みましたね

怒涛のような一年間でした。政治家や企業経営者など、普段接することができない人々と交流することができましたし、いろんな角度から世の中を見ることが大切だということも学びました。こうしたことを（学生という）早い段階で知ることができたのは、すごく良かったと思います。そして、今回の経験を大きな財産として将来に役立てていければと思っています。

——最もうれしかったのは

イベントの開催日がなかなか決まらなかったことです。最終的に開催の2カ月前の2月4日に決まりましたが、万博のルール上、決まる前に広報することができず、参加者やスポンサー集めは開催日

●大学の教育理念は「自主創造」を十分に発揮することが期待されている。学内外で活躍する2人の学生を紹介する。

類の疾病の解明に役立つことが期待できるほか、爬虫類は哺乳類の祖先と考えられていることから進化の過程でタンパク質の構造や機能がどう変化してきたかという生物学の根源的な問いにアプローチできる可能性もあると考えています。

——なぜ爬虫類の世界に

愛知県の自然豊かな環境で育ち、幼い頃から生き物に興味がありました。その興味を原点になり、生物資源科学部獣医学科に進学。当初は臨床獣医師を目指していましたが、1年生の時に訪れた爬虫類のイベントで爬虫類に魅せられ、大学院はこうしたエキゾチックアニマルの研究ができる渋谷久教授、近藤広孝准教授の研究室の門を叩きました。

——新しい成果は

ヒョウモントカゲモドキにアミロイド沈着があることを見つけ、その原因タンパク質を世界で初めて突き止めました。ちょっと専門的になりますが、病理組織的検査に加え、質量分析法を使ったプロ

本学も若手支援 申請書レビュー導入

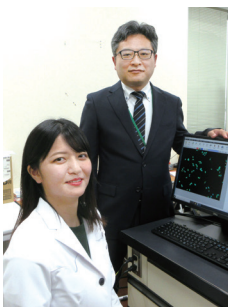
DC2に採用された池田さんには、2年間にわたり月額20万円の研究奨励金のほか、科研費にも受かったため2年間に140万円が支給される。

実は池田さん、前回の令和6年度に博士課程1年次の特別研究員「DC1」に申請したが、不採用になり今回は再チャレンジだった。

採用を勝ち取るに当たって大いに役立ったのが「申請書レビュー支援」と呼ばれるサポート制度だ。研究推進部が特

天然由来成分が脳の炎症抑制 小菅教授ら突き止める

薬学部薬理学研究室の小菅康弘教授らの研究グループは、素材メーカーのシー・アクト（東京都千代田区）と共同で、「ペントデシル」と呼ばれる天然由来の油脂に、脳や脊髄の免疫細胞であるミクログリアの異常な活性化を引き起こされる炎症反応を抑制する機能があることを突き止めた。



小菅教授（右）と鶴田さん

呼ばれるタンパク質を分泌し、逆に神経細胞を攻撃してしまう負の側面がある。

研究グループは、微生物類から抽出され、健康食品成分などに利用されているペントデシルに着目。モデル細胞を使った実験で、炎症性サイトカインを作り出すためのスリッチ子である転写因子の活性化をペントデシルが抑えることを見いだした。

炎症性サイトカインすべてを抑制するのではなく、特定のサイトカインを選択的に抑制する作用メカニズムも明らかにし、ピンポイントに効く新しいタイプの炎症制御成分になる可能性も秘めているとしている。

吉田恵里香さん講演 日藝賞受賞記念で学生にエール

第19回日藝賞受賞記念講演会が6月18日、芸術学部江古田キャンパスで行われた。

受賞者で脚本家、小説家の吉田恵里香さんは「何より大切なのは『書くことが好き』『表現することが好き』『表現することが好き』という純粋な気持ち。困難に直面した時、その情熱があれば乗り越えられる」と、集まった約170人の学生にエールを送った。



吉田さん（右）は自身のエピソードを披露

脚本家のやりがいについて「自分の作品が誰かの人生に寄り添い、小さな光を灯すことができた瞬間に大きな喜びを感じる」と語った。

心掛けていることとして、「自分が心から納得しているものを提出する」「礼儀を大切にすること」を挙げた。とくに礼儀については基本的なあいさつや感謝の言葉が信頼を築く上で重要であると強調。さらに若者にありがちな他者の作品や知見を見下すような姿勢は、クリエーターとしての成長を妨げるとアドバイスをした。

博物館、美術館の入場が無料に

豊かな感性育成に学生全員が対象

博物館や美術館のパートナーシップ制度等に法人として入会したことにより、本学の学生が主要な国立の博物館や美術館に7月から無料または割引料金で入場できるようになった。博物館、美術館の利用を推奨することで、学びを深めることにも豊かな感性を育んでもらうのが狙い。



経済学部

徹底した事前研修が強い インターシップ・プログラム

経済学部は、2、3年期講座として、実社会で生を対象に4月からの活躍する人材になるための実践的な能力を育成する「キャリア形成論」(インターンシップ・プログラム)を開講している。22年間続く同講座の最大の特徴は、インターンシップに送り出す前の徹底した事前研修。企業研究、自己分析から名刺交換、電話の取り

れば常設展は無料、特別展や企画展は割引料金で利用できる。教職員も一部の施設を除き、ほぼ同等の特典を享受できる。

これまで芸術学部など一部の学部・学科が、これらのパートナーシップ制度等に入会していたが、教養教育の補強や、感性豊かな人材育成の観点から、全学的に導入することにした。導入に伴う費用については、日本大学校友会が学生支援事業の一環として拠出する。

めての経験だけに、名刺を渡すタイミングや距離感に苦戦する姿も。学生は「実践的な研修を先取りして経験できありがた。3年生として充実した(就職への)準備ができています」と話している。インターンシップ終了後に成果報告会を開く

学生有志団体Sakura

ボランティア活動報告会を開催

能登支援や身近な減災教育まで

「学生有志団体Sakura活動報告会」が能登半島地震ボランティアとこれからの支援」が6月17日と23日、三軒茶屋キャンパス1階ホールで開催された。17日は前半に昨年度1年間の活動を報告し

医学部の権寧博教授、阿部百合子准教授、理工学部の山口健准教授らは共同で、生成AI(人工知能)を活用した医療面接学習システムを開発した。医学部の学生が問診などの医療面接の練習をする際、模擬患者に似せたAI模

生成AIで模擬患者

医療面接向け学習システム

う。今後、コミュニケーション能力の向上などに取り組む、医学部の新しい教育ツールとして実用化を目指す。同成果は、7月に開催された「日本医学教育学会大会」で発表した。

開発した新システムは、パソコン画面上のAI患者と対話して問診などの練習ができる「写真。例えば医師役が症状を尋ねると、「2カ月前から咳が続いています」などの的確に受け答えができる。22人の医学生がトライアルでは、医療面接のスキルが有意に向上していた。アン

大学用語 辞典

データサイエンス

全学共通の新科目

文理医融合の独自講義

現代社会を生きる上で不可欠な教養として位置づけられる「データサイエンス」。文部科学省も「数理・データサイエンス・AI(人工知能)教育プログラム」の認定制度を設け、大学など教育機関のデータサイエンス教育を後押ししている。

◆今年度から導入

「SNSやIoT(モノのインターネット)などから膨大なデータが日々生み出されていますが、データの真偽を見極め、これらのデータを活用して未来を予測したり、隠れたパターンを見つけることが求められている

現代人にとって必須になっている。同ワーキンググループのメンバーである篠田雅路歯学部教授は「膨大なデータの中には意図的にゆがめられたフェイク

「SNSやIoT(モノのインターネット)などから膨大なデータが日々生み出されていますが、データの真偽を見極め、これらのデータを活用して未来を予測したり、隠れたパターンを見つけることが求められている

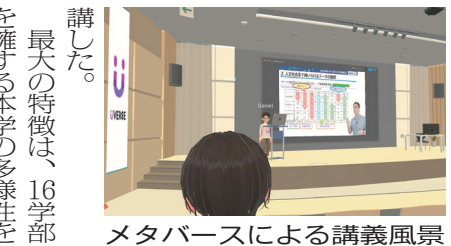


インタビューに答える大熊教授(右)と篠田教授

◆文科省が認定制度

文科省は「データサイエンスを体系的に理解し、社会で活躍できる人材養成を目的に、教育機関向けの認定制度を創設し、

認定を取得する大学が相次いでいる。本学もこの流れに乗り全学共通科目として今年度から授業をスタートし、令和8年度の認定取得を目指している。



メタバースによる講義風景

できない多様な視点からデータの見方や活用方法を広く学ぶことができま

◆今後は付属生も

前年度から導入した全学LMS(学習管理システム)を利用し、授業動画を順番に視聴しないと次の内容に進めないようにし、最後にまとめて受講するよう効果の薄い学びを防ぐ措置も講じている。データの取得、分析、加工、可視化を行いながら、エビデンスに基づいた議論ができるまで、データサイエンスの一連のスキルを身に付けることができる。

「高大連携教育」の一環として、今後は本学入学者は以下の通り(中綴章以上・5月9日判明分)。



上條理事

昭和医科大学長 上條理事が就任

本学医学部校友で理事の上條由美氏が昭和医科大学(旧昭和大学)の学長に就任した。昭和3年

春の叙勲

本学関係4人受章

政府は4月29日付で令和7年春の叙勲受章者を発表した。本学関係者は瑞宝重光章の奥田正昭氏(元大学院法務研究科教授(任期制)、元東京地方裁判所長(中央大卒))、森和紀氏(名誉教授、元文理学部教授、東京教育大(現筑波大)大学院理学研究科)

◇旭日中綴章 中澤幸男氏(元宮城県議会議員、法卒)

◇瑞宝中綴章 杉本稔氏(名誉教授、元副学長、元法学部長、元理事、元評議員、大学院法学研究科修士課程修了)

元文理学部教授、東京教育大(現筑波大)大学院理学研究科)

学生たちの活躍の場

日本大学には学生それぞれの興味に応じて選択できるゼミナールや研究室が多数あります。
本コーナーでは、学生たちの活動をクローズアップします。

INTRODUCTION

02

生物資源科学部

園芸植物生命科学研究室



遺伝子解析技術を駆使して 野菜、果物、花の品種改良に挑む

園芸植物生命科学研究室は、令和5年度に生命農学科がアグリサイエンス学科に改組されたことに伴い、野菜、果物(果樹)、花の幅広い園芸植物を研究対象とする研究室として誕生した。いずれも遺伝子解析を共通の研究手法としているのが特色だ。園芸という趣味としての家庭菜園などが想起されがちだが、同研究室は実用植物を使った生命科学の実践と、フィールド(農場)での生産技術の習得の両者を究め、園芸植物の品種改良の基礎となる遺伝子情報の解析と現場への応用に取り組んでいる。

◇実験技術と栽培技術の両方を養う

現在、同研究室には3年生22人、4年生40人、大学院生4人が在籍。指導は立石亮教授(果樹・野菜園芸)、上吉原裕亮准教授(果実分子生理)、東未来専任講師(花の分子生理)が担当している。立石教授は「学生は基本的な分析技術や遺伝子解析手法を身に付けた後、食感や色、香りなど専門分野の研究に進みます。遺伝子レベルの実験から実際の栽培まで行うため学ぶことは多岐にわたりますが、実社会で必要な実践力と知識を養うことができます」と話す。

果実栽培の盛んな福島県出身の佐藤直輝さん(大学院2年)は「専門で研究するなら、身近な野菜や果物のおいしさを深堀りしたい」と考え、同研究室を選択。



実験室でゲノム解析技術を学ぶ

トマトの食感を研究し、福島県職員への採用が決まり、果樹の研究職を志望している。「将来は出身地である長野県で、リンゴやブドウの品種改良に関わりたい」と話すのは小林駿太郎さん(同1年)。現在はパッションフルーツの香りを構成するゲノム解析に取り組んでいる。

一方、実家が埼玉県で農業を営んでいるという坂田忠大さん(同)は、ペチュニアの花の発色と、植物の成長を調節する植物ホルモン剤の関係を研究中。「実家を継ぐことも考えつつ、まずは公的機関の研究職となって経験を積むことが目標」と話す。

東専任講師は「教員と学生が自由に意見を交わし、視野を広げながら課題解決に挑むのが当研究室のいいところ」と指摘する。卒業生は農林水産省や県庁の農業関連職員をはじめとする公務員のほか、種苗や食品メーカーなどの開発部門で活躍している。卒業後もよく研究室を訪れるといい、学生は先輩のリアルな話を聞きながら将来の道を決める参考にしている。

◇香辛料メーカーや「GREEN × EXPO 2027」に協力

基礎研究から応用まで扱うため、地域や企業との連携も期待される。これまでに香辛料メーカーと協力して収穫の容易なトウガラシを開発するなど、実績を上げてきた。

また、横浜市で開催予定の「GREEN × EXPO 2027」では展示植物の選定試験の依頼を受けているほか、さまざまな貢献をしている。上吉原准教授は「近年、果実は甘さから香りに関心が移っている。蓄積したデータを生かし、新たな品種開発に結び付けていきたい」と意欲を語った。

INTRODUCTION

01

法学部

三村ゼミナール



アメリカへの特許出願を体験し グローバルなビジネス感覚を養う

法学部で知的財産法(知財法)を扱うゼミナールの中でも、三村ゼミでは、学生が主体となって実際にアメリカに特許出願を行っている点が最大の特徴だ。担当の三村淳一教授は約16年間、大手電機メーカーの米国駐在員として特許取得の実務に携わった。「海外の弁理士資格を持つ教員はほとんどいないため、国内の大学で米国の特許出願を実践しているゼミはここだけでしょう。学生には他ではできない学びを体験してほしい」と話す。

現在は3年生22人、4年生20人が在籍し、知財法を主軸として特許法、意匠法、商標法、著作権法など関連する法令について、理論と実務の両面から研究に励んでいる。

◇特許出願経験が自信につながる

3年生は国内の判例を取り上げ、知財法関連の法令を基礎から学ぶ。毎週のゼミでは、担当者が発表した判例研究を基に議論を展開する。夏と冬の長期休暇にはグループワークを経験し、秋の学部祭のフォーラムでも研究発表をするなどアクティブだ。「ゼミ活動は学生主体。私はアドバイザーに徹しています」と三村教授。恒例の米国への特許出願はサブゼミで行う。今年は3グループに分かれ、前期に新製品の発明に取り組んだ。創作した製品の出願実務を後期に行い、11月から12月ごろ



3年生は国内の判例を個別に担当して発表

に出願して来年3月に公開公報が発行されれば、当面の目標達成となる。出願プロセスを体験することが趣旨だが、実際に米国特許取得した例もあるほど、学生の取り組みは真剣だ。

「判例研究(権利活用)と特許取得(権利取得)」という異なるアプローチで知財法を学べるのが面白い」と話す石関裕さん(経営法学科3年)。「家事関連の製品を考案しましたが、出願前に周知されると特許取得要件である『新規性』を失うため、グループ間でも秘密は厳守しています」。3年生のゼミ長を務める小林美紅さん(法律学科)は「ゼミ運営は学生主体で責任は重いのですが、役割分担して工程管理するなど、社会人に必要なスキルも身に付きました」と成長を実感する。

4年生は個別に卒業論文に挑む。4年生ゼミ長の水上将希さん(経営法学科)は「特許出願の経験は自信になり、就職活動でも役立ちました」と振り返る。現在は「生成AIによる著作権侵害」をテーマに卒業論文を執筆中。「進行中の問題なだけに難しいが、やりがいがあります」と目を輝かせた。

◇多彩な分野への安定した就職実績

知財法関連の知見や特許出願の経験はあらゆるビジネスで重要度が高いため、卒業後の進路も幅広い。メーカーや金融、不動産、コンサルティング、情報処理と、多彩な分野で就職実績を重ねている。また公務員として知財法関連の専門職に就くことを目指し、三村ゼミからは毎年2人程度が大学院に進むという。三村教授は「最近海外に目を向ける学生も増えてきました。グローバルな活躍を望む意欲は喜んで後押ししたい」と期待を大きくしている。

INTERVIEW

保護者に役立つミニ講義

育児・介護休業法 10月改正で何が変わる？

仕事と育児の両立を支える働き方の選択増
事業主の積極的な対応を促進

育児や介護は男女が共に担うべきといわれながらも、依然として大きな差があるのが現状。10月1日に施行された育児・介護休業法の改正はこうした問題の解決につながるのか。法学部法律学科の藤井直子准教授に聞いた。

家事育児時間の男女差縮小に期待

今回の改正で変わったのは2点。1点目は「柔軟な働き方を実現するための措置等」です。事業主は、3歳から小学校就学前までの子を養育する労働者に対し①始業時刻等の変更②テレワーク等③保育施設の設置運営等④養育両立支援休暇の付与⑤短時間勤務制度の中から二つ以上を実施することが義務化され、労働者はその一つを利用できるようになりました。未就学児を育児中の労働者にとって、働き方の選択肢も増えることになります。

2点目は「仕事と育児の両立に関する個別の意向聴取・配慮」の義務化です。対象となる労働者の意向を個別に確認することが必須となったため、勤務時間などの要望を伝えやすくなるでしょう。

改正の背景には少子化対策と企業の人材確保があり、男性の育児参加を促す効果もあります。令和3年の総務省「社会生活基本調査」では、6歳未満の子を持つ夫婦の一日の家事育児等時間は妻7時間28分に対して夫は1時間54分と大きな差が。男女共

に働き方の選択肢が増えることで、家事等時間の男女差が縮小することも期待されます。

柔軟な制度設計で事業主の負担軽減も

事業主にとって今回の改正は、育児をしながらキャリア継続・形成をする社員の支援となり、離職の抑止、活躍の促進、企業価値の向上といったメリットがあるでしょう。一方、意向聴取や就業規則の改定などの事務作業、人員補充やコスト増などの負担が生じる懸念もあるため、中小企業には、厚生労働省等の「両立支援等助成金」など、負担軽減策が講じられています。なお、会社側の法違反に対しては、虚偽報告に対する過料20万円や社名公表などが定められています。育児・介護休業法に疑問があれば、労働者は各都道府県労働局内の雇用環境・均等室の窓口相談することができます。

育児・介護対策は、労働者の家庭環境や現状が多様なことから、一律の法制度だけで短期間に解決することはできません。とはいえ、今回の改正で育児休業以外の働き方まで意向聴取が義務化されたことは、諸制度の利用を促進し、男女労働者が働き方を選び取る鍵になるかもしれません。

今後も法改正により労働者の権利を拡大しつつ事業主を支援する助成制度を組み合わせるなど、柔軟な制度設計を続けることが望まれます。



法学部法律学科

藤井 直子 准教授

ふじい・なおこ

東京都立大学法学部卒。法務省勤務を経て、早稲田大学院法学研究科博士前期課程修了、同後期課程満期退学。平成24年独立行政法人労働政策研究・研修機構研究助手、27年長崎大助教等を経て令和4年本学専任講師、6年より現職。

日本のマンガはなぜ海外でうけるのか

独自のコマ割り表現とストーリー性が
国境を超えて共感を得る

インターネットの普及とメディアミックスの進化により、映画やアニメとともに日本のマンガも人気を拡大してきた。その背景や、関心の移り変わりと今後について、芸術学部文芸学科の伊藤景専任講師に聞いた。

デジタルの進化が世界同時の熱狂を生む

昭和30年代後半から日本のアニメ作品が海外で放映され始め、その原作としてマンガも注目されるようになります。当時は「鉄腕アトム」(手塚治虫、昭和27年)が「アストロボーイ」と改題されるなど、日本で作られた作品とは意識されていませんでした。平成初頭に「ドラゴンボール」(鳥山明、59年)や「ONE PIECE」(尾田栄一郎、平成9年)など、成人世代にも人気を得る作品が出てきます。いずれも無国籍な世界観やシンプルな冒険物語であることが、国境を超えた共感や感動につながったといえます。

平成20年代に入ると、マンガ配信サイトの隆盛や技術進化で翻訳が容易になったことでマンガのデジタル化が急速に普及。令和2年以降のコロナ禍の巣ごもり消費によりアクセス数が拡大します。日本の最新作品がほぼ世界同時に読めるようになり、アニメとの連携効果も相まって「鬼滅の刃」(吾峠呼世晴、平成28年)が大ヒットしました。異文化への関心が高まってきたこともあり、忍者、侍、鬼といった日本

独自の文化にも注目されている点が、以前とは異なっています。

日本文化の理解促進にも有効

アメリカではアメリカン・コミックス(アメコミ)、フランス語圏ではバンド・デシネが独自の技法を確立していますが、日本のマンガは映画のカットに影響を受けたコマ割りが大きな特徴。限られた誌面の中で読みやすくストーリーを展開するため、セリフや効果音の文字情報と画像を効果的に配置する手法が進化しました。独自のコマ割りが生み出すインパクトとスピード感は、いまや映画にも影響を与え、日本の技法でマンガを描きたいという海外の作家も増えています。メディアの多様化を背景に、出版社は積極的な海外進出を試み、海外の作家を日本でデビューさせる例も出てきました。

教育的な観点から見ても、日本文化の理解促進、日常的な日本語学習にマンガは有効というメリットもあります。若年層の文字離れが進む一方、あらゆる分野でマンガが入門書として活用されるなど、単なる娯楽に収まらない価値が認められるようになっています。

「マンガなんか読んでいないで!」というのは昔の話。日本のマンガが世界標準のフォーマットになる日は、そう遠くないでしょう。



芸術学部文芸学科

伊藤 景 専任講師

いとう・けい

平成26年本学芸術学部卒。令和2年本学大学院芸術学研究科芸術専攻博士後期課程修了。博士(芸術学)。平成27年日本ウェルネススポーツ大非常勤講師、令和2年本学助手等を経て7年より現職。

INTERVIEW

保護者に役立つミニ講義

渋滞しにくい運転法とは

車間距離を空け過ぎないことが
渋滞を減らす近道

仕事に使うだけでなく、買い物や子どもの送迎、休日のお出かけなど、日常生活でも車は欠かせないもの。一般道を中心に、渋滞を減らせるかもしれない安全・快適な運転のポイントを中心に理工学部交通システム工学科の青山恵里助教に聞いた。

交通容量の減少で渋滞が発生

交通渋滞の発生には、道路幅や交差点の構造など道路側の要因と、走行する車の種類や運転方法による要因があります。1時間に通過し得る最大の車両台数を交通容量(以下容量)と言いますが、この容量を上回る車が通る、あるいは容量自体が減少することで渋滞が発生します。

私は平成30年ごろから全国各地の容量の研究に取り組んできましたが、昭和後期に比べ現在は全国的に容量が低下しています。都内の観測結果では現在は過去と比べ約75%低下し、渋滞が起きやすくなっていることが分かりました。

その最大の要因として、ドライバーは以前に比べ車間を大きく空ける傾向にあることが挙げられています。また、交差点で信号待ちをする際、以前よりも車間距離を広く空けていることがよく見られます。車1台分以上が停止できるスペースを空けて信号待ちをしていることがありますが、本来は2台停止できる所に1台しか入らないので容量は半減し、渋滞につながっ

ているのです。

事前の情報確認が大事

車間距離が大きくなった理由は三つ考えられます。一つはエコドライブの浸透で、ゆっくり発進、ゆっくり停止、車間にゆとりを持った運転をするようになったこと。二つ目は赤信号でカーナビやスマートフォンを見ているために発進が遅れること。三つ目は、高齢者など慎重なドライバーが増えたことです。他にもAT車や環境配慮型車両の増加、燃費向上や追突防止といった車両機能の変化も考えられます。安全運転やエコドライブは望ましいことながら、過大な車間距離が渋滞の原因になり、さらに渋滞に起因する事故や環境への影響が発生している状況です。これらを解消するには、ドライバーが意識を変える必要があります。

具体的には、運転に集中し適切な車間距離で走行・停止すること。事前に渋滞情報を確認することも大事です。観光地等では渋滞する地点や時間帯をずらすために、推奨ルートや立ち寄りポイントの情報提供がされている例もあります。一方、渋滞を避けるために細い抜け道を走るとは、歩行者等との事故のリスクを高めるためお勧めしません。周囲をよく見て、自分が渋滞の原因になっていないか気を配りつつ運転するようにしましょう。



理工学部
交通システム工学科 青山 恵里 助教

あおやま・えり

平成27年本学理工学部卒。29年本学大学院理工学研究科社会交通工学専攻博士前期課程修了。令和2年本学大学院理工学研究科交通システム工学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。同年本学理工学部助手、3年国土交通省国土技術政策総合研究所研究官等を経て6年より現職。

野生動物と共存していくには

無自覚・自覚的餌を与えない
野生動物はペットとは違うという教育を

クマやシカ、イノシシ、サルなど野生動物が人間の生活圏に出没し、農作物を荒らしたり、人に危害を加えるといったニュースが増えている。野生動物と人間が共存していくにはどうしたらよいか。生物資源科学部の三谷奈保准教授に聞いた。

野生動物出没の原因を知る

野生動物が人間の生活圏を侵すようになった原因は、いくつか挙げられます。

一つは、多くの地域でシカ、イノシシ、クマの個体数が増えています(環境省データ)。二つ目は、山林などの野生動物の生息地と住宅地の境にあった農村の高齢化により耕作放棄地が増え、野生動物の活動域が拡大したこと。三つ目は、人間による無自覚な餌付けと自覚的な餌付けです。

例えばクマは北海道や東北で増加傾向です。シカは1990年代以降増加し、高い水準を推移しています。シカは大雪の年には冬場の餌が不足し、大量死したのですが、温暖化により冬場も生き延びて数が増えていると思われます。山林との境にある農村の耕作放棄地がやぶ化すると、動物が身を隠す場所が増えます。また、放置された農作物や食品の廃棄物は、動物にとって魅力的な餌になります(無自覚な餌付け)。さらに、野山で出会った野生動物に、ペットやサファリパークの飼育動物のように餌を与

える(自覚的な餌付け)人がいます。野生にはない味が簡単に手に入れば人の生活圏に近づくようになります。

人間の生活圏を「魅力のない」場所に

では、野生動物と私たちは今後、どのように付き合っていけばよいのでしょうか。増えすぎた個体数は、適切な数に調整する必要があります。平成27年には認定鳥獣捕獲等事業者制度も始まり、専門の狩猟者による捕獲が始まっていますが、狩猟者の減少は深刻な課題です。野生動物は基本的に人間を恐れるものですが、人間に慣れてしまえば、生活圏を侵すことにもなります。

私たちができることは、まず、人間の生活圏を野生動物からみて「魅力がない場所」にすることです。いらなくなった野菜やカキなどの果実、生ごみは野生動物にとっては野生にはないごちそうです。これらを放置せず、取られないようにすること。野生動物が身を隠せるようなやぶなどの刈り取りや山林との境を整備し、境界線を作ることも必要です。農作物を守るためには電気柵を適切に設置することも効果があります。また、野生動物はペットや動物園の飼育動物とは違うこと、同じように扱うことはかえって野生動物と人間の共存の妨げとなることを小中学校などの学校教育の中で伝えていくことも必要でしょう。



生物資源科学部
動物学科 三谷 奈保 准教授

みたに・なほ

平成5年日本獣医畜産大獣医畜産学部獣医学科卒。7年東京大大学院農学生命科学研究科林学専攻修士課程修了、17年九州大大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻博士後期課程修了。博士(理学)。自然環境研究センターなどを経て24年本学助教、令和5年より現職。神奈川県自然環境保全審議会委員、日本哺乳類学会所属。



Q 物忘れや判断力の低下は加齢により避けられないのでしょうか？

認知症の約7割を占めるアルツハイマー病は広く認識されるようになり、治療薬も開発されてきました。アルツハイマー病は65歳以上で罹患率が急速に高まりますが、50歳代から前段階である軽度認知障害（MCI）として現れることが分かっています。MCIになれば軽い物忘れや判断力の低下が起こりますが、多くの場合これらの症状を「年を取ったせい」と見過ごしてきました。しかしMCIはれっきとした病気であり、数年後には多くの例でアルツハイマー病を発症します。逆に言えば、MCIの段階から早期治療を行うことで、アルツハイマー病の発症を遅らせ、症状を軽減することになります。

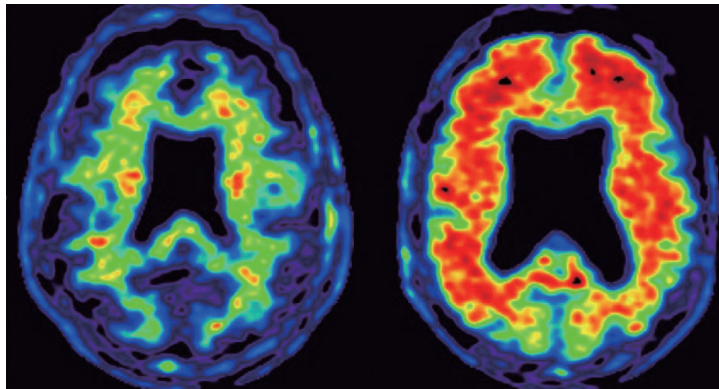
Q MCIにはどんな検査方法や治療方法があるのでしょうか？

「最近、物忘れをするようになった」という自覚症状のある患者の場合、簡易的な知能試験とMRIなどの検査を行います。今後PET（陽電子放出断層撮影）という装置を使い、脳の画像診断を行うことが日本大学病院でも可能になりました。

MCIの患者では知能試験での点数の低下は軽度ですが、回答する際に健康な人より時間がかかったり、何度も間違えて正解にたどり着くことが見受けられます。PET検査では、アルツハイマー病の原因物質の一つであるアミロイドβ（ベータ）を検知することができます。MCIの段階では、徐々にではありますがこのアミロイドβと呼ばれる粘着性のタンパク質が、神経細胞の周りに沈着して情報伝達を阻害します。さらに数年ほど経過してくると神経細胞内ではタウという毒性のタンパク質が蓄積し、神経細胞の障害が進行してアルツハイマー病の発症と進行につながります。つまりアミロイドβの沈着はアルツハイマー病が発症する数年前から発生し、MCIの発症と関係していると考えられるようになりました。

このような病態の解明から、治療としてアミロイドβを除去する薬剤の点滴投与が近年行われるようになりました。沈着量が少ないほど除去しやすいため、治療開始が早いほど効果があります。またアルツハイマー病の発症や進行に、加齢、運動不足や睡眠不足、精神的・肉体的ストレス、生活環境の変化、糖尿病・脂質異常症などの疾患の関与が挙げられています。MCIの進行予防のためには抗アミロイドβ薬の投与はもちろん有効ですが、合併疾患の加療や生活環境の改善が大切で、適度な運動や新聞の音読などを勧めることがあります。

PET 検査によるアミロイドβの検知



左は正常な脳。右の赤い部分がアミロイドβの沈着を示している。
（出典：Lane CAら Alzheimer's disease 2018 より）

これまで「加齢のせい」と放置されてきた認知機能の低下には、加齢だけではなく生活環境や合併症の関与などが考えられるようになりました。物忘れ症状が多くみられる認知症を病気のひとつとして捉えることが大切です。

軽度認知障害（MCI）について知っておこう



医学部医学科

おがわ かつひこ

小川 克彦 診療教授

平成5年本学医学部卒。日本大学医学部付属板橋病院、大田原赤十字病院（現・那須赤十字病院）を経て14年本学助手。19年助教、28年准教授、31年より現職。板橋病院、日本大学医学部付属駿河台病院等にて医局長、病棟医長などを歴任。令和6年より日本大学病院内科科長を務める。

軽度認知障害（MCI）

軽度認知障害（MCI / Mild Cognitive Impairment）とは、正常と認知症の間の状態で、物忘れが出てきてはいるが日常生活は自立している状態を指す。訴えとしては、先程行ったことを忘れるという近時記憶低下が多く見られるほか、判断力・注意力の低下が見られる。進行していくとアルツハイマー病などの認知症に移行する。MCIの状態を確かめることは早期からの治療を可能にし、認知症への移行を遅らせたり、防いだりすることにつながる。

キーワード

物忘れ

アミロイド
β

早期治療

Q 高齢化が進む中、認知症の抑制にはどのような対策があるのでしょうか？

令和4年の調査報告（政府広報オンライン『知っておきたい認知症の基本』）では、65歳以上の高齢者3603万人のうち443万人（12.3%）が認知症患者、559万人（15.5%）がMCI患者となっています。合計すると高齢者の27.8%が認知症またはその前段階にいるということです。こうした現状は行政も重く見ており、各自治体が独自に対策を実施。具体的には認知症の啓発活動や高齢者に会話の場を提供する認知症カフェの運営、ボランティア活動の紹介など多岐にわたります。

医療機関と行政の連携もこうした取り組みの一つ。本学は「日本大学病院メモリーセンター」を立ち上げ、東京都千代田区が進める「認知症サポート」に今後協力していきます。

認知症は、完治することは難しいとはいえ、MCIの段階から早期治療を行うことで、症状を軽減することができます。人生100年となるこれからの時代、より充実した後半生を送るためにも、社会全体で認知症対策を進めることがますます重要になっているといえます。